

人工種苗サザエの放流試験

須川 人志・松坂 洋

近年、サザエ種苗生産技術が進歩し人工種苗貝の生産ができるようになったので深浦町田野沢地先にサザエ種苗を放流し、放流後の生態を観察した。

材料および方法

放流したサザエ稚貝は昭和60年8月水産増殖センターで人工採苗し水槽内で付着珪藻類およびアワビ用配合餌料を用いて飼育した1年貝27,000個である。

放流サザエ稚貝の殻高組成は第1表に示すとおりであり、最大15.0mm、最小4.0mm平均5.9mmの稚貝であった。

放流場所は第1図に示すとおり深浦町田野沢地先の通称「長瀬の崎」に造成された小規模増殖場（増殖溝、以下増殖溝という。）内の水深1mの地点であり、昭和61年7月24日に放流した。

第1表 放流サザエ稚貝殻高組成

殻高範囲	放 流 数	百 分 率
2.1 - 4	567 個	2.1 %
4.1 - 6	18,846	69.8
6.1 - 8	4,455	16.5
8.1 - 10	2,268	8.4
10.1 - 12	648	2.4
12.1 - 14	162	0.6
14.1 - 16	54	0.2
合 計	27,000	

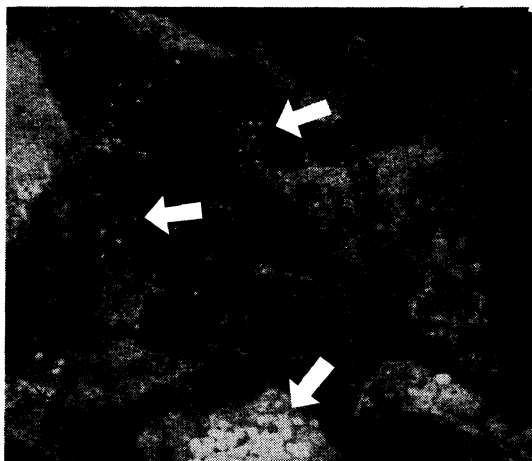


写真1 放流直後

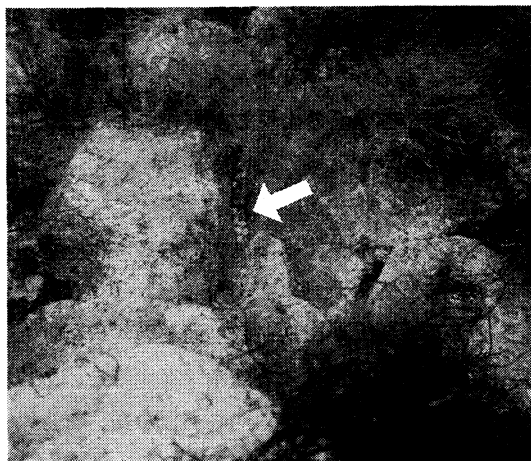


写真2 放流15日目

結 果

放流地点は増殖溝内であるため静穏であり、海底には直径40~50cmの石が乱積されている。海藻はヤツマタモク、ジョロモク、ヨレモク等のホンダワラ類、モヅク、アオサが繁茂した餌料環境の良好な場所である。放流時の水温は20.2℃でありサザエ稚貝の行動が活発であったため放流直後のサザエ

稚貝は石と石の隙間等にスムーズに移動したため放流時に集ったクジメ、アイナメ、メバル、ハゼ類、ウグイ等の魚類の攻撃は比較的少なかった。

放流後の追跡は放流翌日の7月25日、15日目の8月8日、33日目の8月26日、139日目の12月10日の計4回、潜水調査を実施した。

放流翌日の観察では移動はほとんどなく2 m以内に留まっており、放流地点に若干の死殻がみられたが剥離、運搬時に死亡したものと思われた。

放流15日目には放流稚貝の成長が認められ、殻高5.4 mm以上の放流貝には貝殻の周辺部に褐色の痕跡がみられた。また、移動は放流地点から3 m以内に留まっていた。

放流33日目には殻高8 mm以上の放流貝ではヤツマタモク、ジョロモクの主

茎および枝に付着する個体が見られたが、殻高8 mm未満の放流貝ではホンダワラ類の茎等では発見できず石と石の隙間および石の下で見られた。成長は殻高5 mm以上の放流貝で認められ、周辺殻の増加は最大6.7 mm、最小0.1 mm、平均1.9 mmであり殻高10 mm以上の放流貝の成長が顕著であった。移動は放流地点から増殖溝入口方向が主であり、移動距離は5 m程度であった。

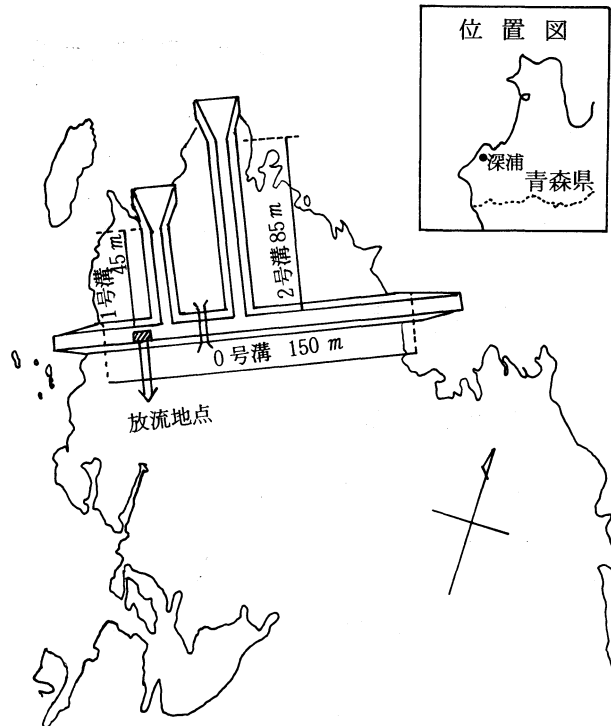
放流139日目には水温が10.8℃に低下しており増殖溝内外を詳細に調べたが放流稚貝は発見できなかった。

考 察

本試験で放流したサザエ種苗は殻高4~15 mm、平均殻高5.9 mmの稚貝であり放流追跡調査の結果、放流後4.6ヶ月で行方が不明になった。放流地点周辺には放流直後の死亡個体を除いて放流稚貝の死殻がないことから放流稚貝は死亡したのではなく何らかの原因で増殖溝外へ移動したものと推察される。移動した原因として次のことが考えられる。

- ① 波浪等の物理的要因で付着力の弱い稚貝が増殖溝外に強制的に移動させられた。
- ② ホンダワラ類の茎に付着した放流稚貝がホンダワラと供に流れ藻になって増殖溝外に流失した。
- ③ サザエ稚貝に適した住み場を求めて、みずから増殖溝外に移動した。

人工種苗は人工飼育中に形成される殻が白色を呈することから天然貝と区別することができるが放流サイズが小さい場合には長期間の追跡調査では判読が困難になる。なお、適正放流サイズは求められなかったが、今後天然稚貝の食性および生息場所の観察を行い求めていきたい。



第1図 位置図および放流場所